

幌向原野地の再生・管理・保全・調査

特定非営利活動法人ふらっと南幌

1. 【活動経緯】 幌向湿原の消失

明治期、夕張川流域に広大な面積をもっていた幌向湿原。北海道空知郡南幌町もこの湿原内に位置しています。先人達のたゆまぬ努力によって、都市化・農地開発が進められ、現在まで継承される開拓の歴史を持つ北海道ですが、その一方で開拓に伴った自然環境の急速な変移があったことも事実です。

かつて 104 km²ほどあった幌向湿原の面積は、現在 0.1 km²にも満たしません。地元南幌町民の中にも湿原が広がっていた事実を知らずに生活している人がたくさんいます。

湿原の消失は気候変動や自然災害などに大きく影響しており、世界でもラムサール条約などを通じてその保全に目が向けられています。

学術的にも貴重である幌向湿原の一端である南幌町保有幌向原野地にて、ふらっと南幌は 2012 年より町の管理許可の下、ミズゴケの着床実験・経過観察や、乾燥化を防ぐための樹木の伐採など、管理・保全・再生調査を行ってきました。

町保有幌向原野地(Google Earth より)



オオミズゴケ移植



2. 【助成事業】 幌向原野地の抜根・整地作業

南幌町では、貴重な植生の保全を理由に農地開拓予定であった一部の区画を原野地として保有しています。昭和 30 年頃までは教育委員会の管轄にあり、植生調査や環境学習の場として利用されていましたが、近年は手つかずのまま長い間放置されていました。

客土や土地改良の影響を受けず、湿生植物の数多く残る貴重な原野地も乾燥化が進み、乾燥環境での樹木が繁殖し、湿生植物の存続が難しい現状を知り、ふらっと南幌では再生事業として様々な手を加え、経過観察を行ってきました。定期作業としてのミズゴケ移植、除草作業に加え、平成 29 年には乾燥化の原因となる樹木の伐採を行い、その後の保水状況を観察しました。今回の助成を受けて、湿原開発の続き作業として、伐採後残っていた切り株の抜根作業を行い、根を取り除いたのちにその場を整地し、移植環境を整えて移植再生スペースを作ることが出来ました。

3.【事業内容】湿原再生作業

①ミズゴケの移植(毎年)

湿原環境には潤沢な水とその水の保水が必要不可欠です。湿原の保水力はミズゴケに大きく依存しており、まずはミズゴケの定着が再生事業の第一歩となります。ミズゴケが十分生い茂ると、その上に湿生植物が増え始め、湿原が形成されていきます。

移植用に栽培しているミズゴケ



ミズゴケ移植作業



②樹木の伐採(平成29年)

大きく成長した樹木は、土地の水分を多量に吸収するため、乾燥化の大きな要因の一つとなります。樹木を伐採し、土地からの水分吸収を防ぎます。

伐採作業後の風景



伐採した樹木



③抜根・整地(令和2年6月)

伐採後の切り株を抜根し、根を取り除いたのち整地を行いました。湿原は泥炭地層であるため地盤が緩く、抜根整地した土地は周りよりも沈み込んで水たまりが多くできるようになりました。結果、保水効果が高まり、移植に適した再生スペースを確保できました。

抜根作業



抜根後の風景



④湿生植物調査・移植(令和2年7月)

原野地内に現存している湿生植物を専門家に依頼して調査してもらいました。マーキングした湿生植物の中から、専門家指導の下、再生スペースに移植を行いました。

湿生植物のマーキング



再生スペースへの移植作業



⑤除草作業(毎年)

原野地内及び原野地周辺にオオハンゴンソウなどの外来植物が繁殖してきているため、定期的に草刈りを行っています。

草刈り作業風景



⑥遮水工事(令和3年6月予定)

原野地は農地開拓地の一画であるため、周囲一帯農地利用されています。湿生植物は雨水などの栄養の少ない水を好むため、湿原に栄養に富む農業排水が流入することは、湿原環境にとって大問題です。周囲からの排水を防ぐために、遮水のための溝を掘る工事を予定していましたが、新型コロナウイルスの影響により、近接農家さんや役場の方との打ち合わせが滞り、工事が難航しております。令和3年には工事を完成させ、更なる湿原環境の改善に進んでいきたい所存です。



ホロマイリンドウ



ホロマイコウガイ



ホロマイクグ



ホロマイスゲ



ホロマイイチゴ



ホロマイツツジ



ホロマイソウ

ほろむい七草：南幌町の前身である幌向村(ホロムイムラ)の地域名を冠する湿生植物が七つあったことから、ふらっと南幌が「ほろむい七草」と命名し、町のシンボルとなるよう普及活動を進めています。再生原野地は、やがてはこの七草が生い茂る湿原を目指して再生事業をこれからも続けていきます。